

なります。知的障がいのある人には、場面や状況、障がいの程度に応じて、「支援付き意思決定」か「代行的意思決定」を採択し、支援を行うことが大切なのだと思います。

その後のシンポジウムは、3名のシンポジストの方から地域での多様な生活についての実践報告がありました。まず、社会福祉法人そうそうの杜 理事 実頼正施氏からは、「すべての人がその人らしく生き生きと暮らせる地域社会を創っていきます」という法人理念のもと、大阪市城東区内で様々な事業を展開されていますが、これらの事業所は賃貸物件で運営され、地域の住宅や商店街の一角に点在しています。そして地域生活支援では、グループホームをやめてシェアハウスを運営し、ヘルパーを派遣することで地域生活を支援する地域生活サポート事業を立ち上げ24時間365日支援が続く体制の中で、現在100名以上の方が地域で暮らしておられるそうです。これまで実践してきた「地域連携」の具体例や今後のさらなる展開への意気込みをお聞きして、これからそうそうの杜が創り上げていく「福祉コミュニティ」に大いに期待したいと思います。

続いて、社会福祉法人南高愛隣会 常務理事 松村真美氏より、法人の自主事業である結婚推進室「ぶ〜け」の取り組みについての報告がありました。「ぶ〜け」では、障がいのある方たちの「ふつうの場所で愛する人との暮らし」を実現するために、①スキルアップ講座(身だしなみや性支援教育)②恋活(婚活)のサポート、③夫婦・パートナー生活の応援、④子育てのサポートの支援を行っておられます。「ぶ〜け」は会員制で、会員数が164名、お付き合い中のカップル22組、結婚、パートナー生活25世帯、子育て中のご家族も1世帯おられます。平成15年の発足以来、障害者総合支援法にはないサービスを法人独自で作成し、愛する人との暮らしを支援してこられました。利用者からの要望も高く事業として継続されていますが、今は、見学に来られる方や相談に乗ってほしい方が多くなっているようで、松村氏は、長崎だけではなく、いろいろな場所で同じ支援ができるようになってほしいと仰っていました。

最後は、当事者でいらっしゃるNPOふれあいネットワーク・ピアの辻浩一郎氏より、山あり谷ありの二人三脚で歩んできた結婚生活の様子についての報告がありました。お二人は、「ぶ〜け」の交流会に参加し、「ぶ〜け」のサポートを受けたくて入会し、交際がスタートしました。互いに結婚を意識するようにな

り、入籍。子どもが好きなお二人は、「ぶ〜け」の先輩が子育てをしている姿を見て、子どもを育てたいと思うようになり、妊娠、出産、子育てについて「ぶ〜け」に相談をしました。しかし、妻にがんが見つかり治療を開始。治療後の妊娠については、両親や担当者、「ぶ〜け」の意見を聞きながら、子どもを産まないことを決断し、妻と寄り添っていく人生を大事にしたいと思ったと話されました。治療を乗り越え、今は元気に暮らしておられますが、妻が家を出てパニックになったことや結婚生活3年目からスランプに陥ったこともあり、その時もたくさんの方の助言やサポート、仲間の支えがあり、危機を乗り越えられたと周りの人への感謝を伝えておられました。「周りの人がいなくなったら今の僕たちはいない。妻と仲良くやっていくためにも思いやりの心を大事に、言葉を出し合っていければいいと思う」との辻氏の言葉に会場が拍手で包まれ、温かい気持ちで終了した分科会でした。

「第3分科会 シニア世代の暮らし方
~健やかな高齢期を目指して~
福島育成園(入所) 管理者 林 祥子

第3分科会では【シニア世代の暮らし方~健やかな高齢期を目指して~】というテーマでの講演とシンポジウムが行われました。会場はほぼ満席。多くの方が関心を寄せていることを実感しました。



冒頭の講演では、国立のぞみの園客員研究員 岡田氏が【知的・発達障がい者のライフステージと生きがいづくり~将来を見据えた支援を考える】と題して、加齢にかかる研究や調査結果をもとに高齢期を過ごす上で重要な視点がいくつも話されました。

まずは、医療の進歩や生活の改善等により寿命が飛躍的に伸びた反面、自覚症状を訴えることの難しさや様々な拘り、早期に身体機能が低下してしまうなどの障がい特性から、多様な疾患に罹りやすい側面があるとのお話。特に、歯・聴力・視力など周りから変化が見えにくい疾患は対応が遅れがちなため、日ごろから